

物語に見られる「ナル表現」 —『星の王子様』の和訳に現れた「ナル表現」と英訳の対照研究—

守 屋 三千代

要旨

本稿は『星の王子さま』の和訳に現れた動詞「ナル」の意味・用法を分類し、英訳と対照するものである。原文がフランス語である『星の王子さま』を選んだのは、この原文および翻訳が筆者の主催する「ナル表現研究会」で行う通言語的研究の共通テキストであることに拠る。本稿で採用した『星の王子さま』では全50例ほどの「ナル」を伴う用例が得られ、その英訳は変化表現・未来・状態表現・スルの表現、および義務表現に分かれる。このうち変化動詞があまり用いられない傾向と、未来形とスルの表現で訳される傾向が観察された。このことは日本語で時間幅をもってアナログ的に捉えられた事態が、英語では静的かつデジタル的に捉えられる傾向を示唆する。

キーワード：「ナル」・‘be’・事態・変化・認知言語学

1. はじめに：本稿の目標

筆者は、これまで「ナル表現研究会」（科研費28年度～31年度基盤研究C16K00217「『ナル表現』の認知言語学的研究—類型論を視野に入れて—」）において認知言語学と通言語学的視点から、「ナル相当動詞」と「ナル表現」の研究を進めてきた。この研究を通じて、以下の点が見えてきた。

1. 認知言語学の概念である事態把握の主観的傾向とナル的言語であることには相関関係が見られるかを最初の検討課題に掲げた。この点について調査項目を作成し、各言語の場合について調査・分析を行った。ユーラシアのナル的言語（トルコ語およびチュルク系言語・ペルシャ語・モンゴル語・韓国語・シンハラ語など）のうち、その多くは主観的事態把握の傾向を示すものの、客観的把握の傾向も示すことが観察された。

2. 1と関連して、「ナル」「ナル相当動詞」の表す出来・変化の主体がどのような格をとるかを観察すると、日本語以外の全ての言語で主格あるいはゼロ格を取り、日本語のように到達点の場所格を取るものはほとんど見当たらないことがわかった。
3. 「ナル表現」の主たる意味は、出来・変化・成立・推移などのうち、どこに求めるべきか、この点について『旧約聖書』を例に取り上げて、出来の表現において「ナル」および「ナル相当動詞」が現れるかを考察した。その結果、ユーラシアのナル的言語のうち、その多くは出来→存在に至る局面で、「ナル相当動詞」が用いられること、一方、少なくとも東アジアの言語（中国語・韓国語・日本語）では存在動詞が用いられることがわかった。
4. 日本語は英語と比べた場合、確かに「ナル的言語」と呼ぶことが適切だと考えられる。これは日本語が英語とは異なり、他動詞表現よりも自動詞表現を好むことに拠る。だが通言語学的に見た場合、日本語の「ナル」および「ナル表現」はどのように位置づけられるか、改めて検討する必要性が見えてきた。これは、日本語の「ナル」が他のユーラシアの「ナル的言語」に比べ、新事物の出来を表す用法がほとんどなく、かつ到達点の「二格」を伴い、時間幅を伴う変化・推移の用法が多いことにある。
5. 事物の出来か変化かという観点に拘らず、異なるテキスト、例えば口語的な文章について考えてみる必要性も見えてきた。それはユーラシアのナル的言語において「ナル」には本動詞や補助動詞など、様々な用法があるからである。ここにおいて、他の言語と共通するテキストを使用して、「ナル・ナル表現」を調べ、対照することが新たな課題となった。

研究会では5の問題を取り上げることとし、まずは共通テキストに『星の王子さま』を選ぶこととした。それは、この作品が口語的な表現で書かれており、これまで十分に上げられていない用法が観察されること、筆者の研究会で上げるほぼ全ての言語において、翻訳版が得られることが理由の一つである。確かに、原文は明らかに「ナル的言語」ではないフランス語で書かれており、日本語の「ナル表現」に相当する部分は、その多くが再帰代名詞を伴う再帰動詞で現れる。しかし、最初から「ナル的動詞」で書かれなため、かえって「ナル」の現れ方の相違が観察されやすいと考えた。そこで、口語的な共通テキストとして、まずは『星の王子さま』を対象とした。

以下、本稿は日本語版『星の王子さま』に現れた「ナル」とその英訳を中心に、口語的に書かれた物語では「ナル」がどのように現れるか分類し、それぞれ英訳

と対照しながらその意味・用法を観察する。

2. テキストについて

本稿では Antoine Marie Jean-Baptiste Roger de Saint-Exupéry 1943 *Le Petit Prince*, 2010『星の王子さま』 Richard Haward (英訳)・小島俊明 (和訳・注解) : 第3 書房をテキストとする。Richard Haward 訳を選んだのは、最新の英訳であるとともに、英文がこなれた読みやすい訳となっているためである。対訳本を選んだのは、ほぼ文ごとに忠実な訳が付せられており、「ナル」がどのように英訳されているかを見るのに便利だからである。

3. 『星の王子さま』に見られる「ナル」と英訳

本文に表れた「ナル」の英訳は、形式に応じて次のように分類される。本稿では分類のポイントを日本語では事態を推移の観点で「ナル」で表しているところを、英語ではどのように表すかに置く。

- 3.1. 「ナル」の表す変化を変化動詞で訳す。
- 3.2. 「ナル」の表す未来実現を未来形 “will” を伴って訳す。
- 3.3. 「ナル」の表す時間幅を表現せず、状態や存在を表す動詞で訳す。
- 3.4. 「(ナケレバ) ナラナイ」の義務的表現を義務の助動詞で (目的語を伴う形式で) 訳す。
- 3.5. 「ナル」とは対照的な「スル」的表現の構文で訳す。

以下、上記に従って結果を示す。頁番号は Richard Haward・小島俊明 2010 のものである。

3.1. 「ナル」の表す変化を変化動詞で訳す

ここでは ‘get’, ‘come’, ‘learn’, ‘grow’, ‘amount’, ‘become’ などの変化動詞が用いられており、いずれも時間幅を持った徐々に実現することを表し、この点で、「ナル」と意味的な近さが実現する。ただし、到達点あるいは目標とする事態が想定されている点で、「ナル」の意味とは厳密に重ならない。本テキスト全体では、こうした例は次のように現れ、「カレ」の例の 20% に満たない。

grow

1. 王子さまは～そして、こんなにも指示に忠実なその点灯夫をますます好きになった。

The little prince watched him, growing fonder and fonder of this

lamplighter who was so faithful to orders. [p.97]

2. いつの日か、もし自分の星がなつかしくてたまらなくなったら、おれ、あんたを助けてやる。

I can help you, someday, if you grow too homesick for your planet.
[p/115]

get:

3. なるほど地理学は、たいへん役に立ってきた。～それは夜間、方角がわからなくなったりしたら、たいへん役に立つ。

And, as a matter of fact, geography has been a big help to me. ~ which is very useful if you get lost during the night. [p.11]

4. 蝶々と知り合いになりたかったら、二、三匹の毛虫には我慢なくちゃ。
I need to put up with two or three caterpillars if I want to get to know the butterflies. [p.65]

learn:

5. 日ごとに、ぼくは、王子さまの惑星について、～何かを知るようになった。

EVERY DAY I'D LEARN something about the little prince's planet, ~[p.35]

6. まもなくぼくはその花をもっとよく知るようになった。

I SOON LEARNED to know that flower better. [p.53]

come:

7. ぼくはこうして、きみの憂鬱な人生が少しずつ理解できるようになった。

Gradually, this was how I came to understand your sad little life. [p.45]
become

8. 子供たちは、ほろきれ人形に時間を費やすから、その人形がとても大切になるんだ。

They spend their time on a rag doll and it becomes very important.
[p.143]

3.2. 「ナル」の表す未来実現を未来形 “will” で訳す。

ここでは事態の実現が未来の時点で起きることに着目され、そのため未来時制が選ばれている例である。つまり、ここでは3.1とは異なり、「ナル」で表され

る線的な事態の実現が、英語では点的な事態の実現として捉えられている。ここでの日本語の線的な実現とは、事態の結果が判然とするに至るまでの推移をカバーする。

ここで現れる例文は、いずれも「(こと・よう・みたい) に／とナル」という形式を取り、「ナル」の変化の到達点を示す。問題は英文では到達点は示されず、あくまでも未来時制における事態を指す。そのため、一見日本語と英語の表現が近い関係にあると見えるが、実際は日本語では事態の推移を含めて、アナログ的に捉えているのに対し、英語では未来のある時に事態が点的、デジタル的に捉えていると考えられる。

will+be:

9. それはいつになりそうですか？

And when will that be? [p.73]

10. でも、これは見捨てられた古い殻のようなものになるんだ。P.169

But it'll be like an old abandoned shell.

11. ぼくも星を眺める。すると、星という星が、さびついた滑車のある井戸になるだろう……

I'll be looking at the stars, too. All the stars will be wells with a rusty pulley. [p/173]

will+ 状態動詞

12. 「ある人を知ってる」と王子さまは言った。「その人は悪い探検家になるかもしれない」

"I know someone," said the little prince, "who would be a bad explore." [p.103]

13. きみはぼくにとって、この世で唯一の少年になるだろう。

You'll be the only boy in the world for me. [p.129]

14. ぼくもきみにとって、この世で唯一の狐になるだろう。

I'll be the only fox in the world for you. [p.129]

15. そうすれば、あのネズミの命は、おまえの判決しだいとなる。

That way his life will depend on your justice. [p.75]

16. そうすれば、昼間が自分の好きなだけ、続くことになるよ。

And the day will last as long as you want it to. [p.97]

will+ 知覚・感情動詞

17. ほかのすべての足音とは違う足音にぼくは気づくようになるだろう。

I'll know the sound of footsteps that will be different from all the rest.
[p.131]

18. そのうえほくは麦のなかの風の音が好きになるだろう。

And I'll love the sound of the wind in the wheat... [p.131]

19. ほく、苦しんでみたいになるよ。

It'll look as if I'm suffering. [p.169]

20. ちょっと死んでいくみたいになるよ。

It'll look a little as if I'm dying. [p.169]

21. ほくは死んだようになるけど、それは本当じゃないんだよ。

I'll look as if I'm dead, and that won't be true. [p.169]

will+ 所有

22. きみは誰も持たないような星を持つことになるんだ……

You, though, you'll have stars like nobody else. [p.167]

23. きみは、笑うことのできる星を持つことになるんだ！

You'll have stars that can laugh. [p.167]

3.3. 「ナル」の表す事態の推移の時間幅を表現せず、状態や存在の動詞で訳す

ここでは3.2のように'will'を伴わずに、'be'、可能の形式'can' 'be able to'、感覚動詞'feel'などが現れる。いわば日本語が事態をアナログ的にとらえるのに対し、英語が同じ事態をデジタル的にとらえていることを示す例である。

'be'+ 名詞／形容詞

24. ほくの友だちが羊を連れて行ってしまってから、もう六年にもなる。

It's already been six years since my friend went away. [p.33]

25. わしの政治学に従って、状況が都合よくなるのをまつとしよう。

I shall wait, according to my science of government, until conditions are favorable. [p.73]

26. 状況はよくなっているように思えますが……

It seems to me that conditions are favorable... [p.77]

27. (ある星に住む花が好きになったら、) 夜空を見あげることが楽しくなる。

(If you love a flower, that lives on a star,) then it's good, at night, to look up at the sky.) [p.165]

28. すると、友人たちはきみがおかしくなったと思うだろう。

And they'll think you're crazy [p.167]

29. すると、ぼくは嬉しくなる。

Then I'm happy. [p.179]

可能 : be able to, can

30. ボア大蛇たちは、獲物を囓まずにまるごと飲みこむ。すると、もう動くことができなくなって、～彼らは眠る (p.9)

Boa constrictors swallow their prey whole, without chewing,
Afterward they are no longer able to move, and they sleep ~ [p.9]

31. 一本のパオバブでも、とりかかるのが遅すぎると、もう絶対に片づけられなくなる。

Now if you attend to a baobab too late, you can never get rid of it again. [p.39]

進行中 : be ~ing

32. 星は年々少しずつ速く回転するようになっているのに、

Year by year the planet is turning faster and faster, [p.93]

33. あらゆる星が、花ざかりになる。

All the stars are blossoming. [p.165]

感覚 : feel

34. そして、これを最後に花に水をやり、覆いをかけるとき、王子さまは泣き出したくなった。

And when he watered the flower one last time, and put her under glass, he felt like crying. [p.61]

35. 一週間につき一錠飲むと、もう水を飲みたいとは思わなくなる

Swallow one a week and you no longer feel any need to drink [p.145]

感情 : love

36. ある星に住む花が好きになったら、(夜空を見あげることが楽しくなる。)

If you love a flower, that lives on a star, (then it's good, at night, to look up at the sky.) [p.165]

3.4. 「(ナケレバ) ナラナイ」の義務的表現を義務の助動詞で(目的語を伴う形式で) 訳す。

ここでは 'have to' 'must' 'to be past participle.' などの形式で義務を表す。目

的語を取る点で、他動詞あるいは他動詞を伴う受身の構造を取っていると考えられる。

37. 何度も何度も、彼らに説明をしなければならぬのは、子供たちにとっては、うんざりである。

It is exhausting for children to have to provide explanations over and over again. [p.11]

38. そこでぼくは別の職業を選ばなければならぬ、飛行機の操縦の仕方をおぼえた。

So then I had to choose another career, and I learned to pilot airplanes. [p.11]

39. しかし、悪い植物なら、気づくやいなやすぐ抜きとらねばならぬ

But if it's the seed of a bad plant, you must pull the plant up right away. [p.39]

40. 一つの星の上に、～この地球の上に、慰めてあげなければならぬ一人の王子さまが存在していた！

There was, on one star, ~ the EARTH, a little prince to be consoled! [p.53]

出典文中では、次のように「(ナケレバ) ナラナイ」ではなく、「(ナケレバ) イケナイ」が義務表現に選ばれる傾向も見られた。「それには何をしなければいけないの」と王子さまは訊いた。“What do I have to do?” asked the little prince. [p.131] など。

3.5. 「ナル」とは対照的な「スルの表現」の構文で訳す。

ここで言う「スルの表現」とは、他動詞文や使役構文を用いる例を指す。英語では「スルの表現」がより好まれることが指摘されており、(池上 1981) 動作主体と動作の対象が言語化され、自然な推移というよりも動因が明らかにされる点で、「ナル的表現」と本質的に異なる。

41. それによってぼくの見解がよくなることはあまりなかった。

~which hasn't much improve my opinion of them. [p.11]

(逐語訳：そのことが彼らに対する私の見解を大してよくはしなかった)

42. やつと口がきけるようになると、ぼくは彼に訊いた。

When I finally managed to speak, I asked him. [p.15]

(逐語訳：私は何とか話すようにした)

43. 人が羊を欲しがれば、その人が存在している証拠になる。

When someone wants a sheep, that proves he exists, [p.31]

(逐語訳：そのことが彼が存在することを証明する)

44. たった一輪しか存在しない花を愛しているなら、それだけでその星たちを眺めるときに充分幸福になれる

If someone loves a flower of which just one example exists among the millions and millions of stars, that's enough to make him happy when he looks at the stars. [p.53]

(逐語訳：そのことが彼を幸せにする)

45. ごめんなさいね。お幸せになってね。

I ask your forgiveness. Try to be happy. [p.65]

(逐語訳：幸せであるよう努めてください)

46. きみの薔薇の花がそんなにも大切なものになったのは、きみがその薔薇の花のために時間を費やしてしまったからなんだよ。

It's the time you spent on your rose that makes your rose so important. [p.139]

(逐語訳：そのことがあなたのバラを大事なものにします)

47. そのときには、〈そうなんだ、星を見るといつも笑いたくなるんだよ！〉
と言うのさ。

Then you'll tell them, 'Yes, it's the stars; they always make me laugh!' [p.167]

(逐語訳：彼らは私を笑わせる)

4. おわりに

以上、『星の王子さま』の和訳文に現れた「ナル」の意味・用法、および英訳との対照を試みた。以前の研究で焦点としてきた、日本語では一つの事態を、いかに時間幅をもってアナログ的に表現しようとしているかが観察された。このことは、この物語が登場人物たちの行動と心理を追うものであることとも無関係ではあるまい。今後は、他の物語作品を調べるとともに、論理的な文章を取り上げ、「～となると、～なる」「～の結果、～となった」「～と言わざるを得なくなる」といった思考のプロセスに関わる表現において、「ナル」がどのように関わっているか、英語や他のナル的言語とで対照し、「ナル表現」全体の意味・用法の広がりをつたいたい。

今回、テキストの英訳者がアメリカ英語の話し手であったためか、3.1の用例に‘turn’が現れなかった。イギリス英語では、“It’s just turned twelve o’clock.” “My son turned twenty years old.”のように、‘turn’を用いて事態を推移として捉える例が観察される。今後はこうした英米の相違も視野に入れて考察したい。同様に、日本語訳も内藤濯訳（岩波書店）や河野万里子訳（新潮文庫）その他を参照・比較していない。こうした翻訳文による相違にも、今後は目を配る必要がある。フランス語原典との対照も必要であることは言うまでもあるまい。

参考文献

- 荒木博之（1983）『やまとことばの人類学』朝日選書
池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
———（2000）『日本語論への招待』講談社
森田良行（1988）『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』講談社現代新書
守屋三千代（2011）「現代日本語の『ナル』と『ナル表現』—〈事態の主観的把握〉の観点より—」『日本認知言語学会論文集』第11巻 560-563
『日本認知言語学会論文集』第12巻 537-542
———（2016）「日本語話者が見た『ナル表現』」『日本認知言語学会論文集』第16巻 587-592
———（2018）「ユーラシアの『ナル表現』から日本語の『ナル表現』を再考する」『日本認知言語学会論文集』第18巻 598-602
———（2019）「『ナル表現』とは何か—出来・存在・変化の観点から考える」『日本認知言語学会論文集』第19巻 593-598
山口明穂・秋本守英編（2001）『日本語文法大辞典』明治書院

用例出典

- Antoine Marie Jean-Baptiste Roger de Saint-Exupéry 1943 *Le Petit Prince*, Richard Haward（英訳： *The Little Prince*）・小島俊明（和訳・注解）2010『星の王子さま』第3書房

本稿は、科研費 28 年度～ 31 年度基盤研究 C 16K00217「『ナル表現』の認知言語学的研究—類型論を視野に入れて—」に基づく研究である。

（もりや・みちよ、創価大学文学部教授）